JASE
現代性教育研究ジャーナル
2012年
No. 19
2012年10月15日（毎月15日）発行
日本性教育協会
THE JAPANESE ASSOCIATION FOR SEX EDUCATION

〒112-0002 東京都文京区小石川2-3-23 春日尚学ビル Tel.03-6801-9307 Mail info_jase@faje.or.jp URL http://www.jase.faje.or.jp 発行人 鈴木 勲 編集人 本橋道昭
© JASE. 2012 All Rights Reserved. 本ホームページに掲載している文章、写真等すべてのコンテンツの無断複写・転載を禁じます。

contents

全性連・第42回全国性教育研究大会報告 …… 1
北丸雄二のニューヨークリポート⑲ …… 7
「ありのままのわたしを生きる」ために⑲ …… 8
今月のブックガイド …… 9
JASEインフォメーション …… 10

■全性連・第42回全国性教育研究大会報告

さらに広げよう！　性教育の視野を

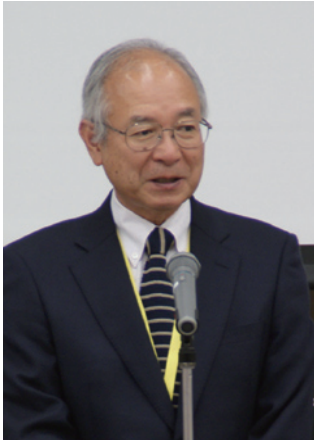
プログラムの一部をジョイント

第42回全国性教育研究大会が、8月2日（木）～3日（金）の2日間、島根県松江市の「くにびきメッセ」で開催された。今回の大会は、第12回アジア・オセアニア性科学学会（AOCS）とプログラムを一部ジョイントし、国際色豊かな大会となった。

大会は、全国性教育研究団体連絡協議会、中国・四国地区性教育研究団体連絡協議会の主催、日本性教育協会の協賛のもと、内閣府、文部科学省、厚生労働省など多くの後援を受けている。

大会冒頭、石川哲也・全国性教育研究団体連絡協議会理事長は、「ここ数年来、性教育冬の時代と言われてきましたが、最近、新たな兆しが見えてきました。各地で少しずつ盛り上がりを見せ、世界的に見ても長い間新しい資料が出てこない時期が続きましたが、近年WHOの活動などに新しい動きが見られます」と述べ、この大会にかける意気込みを大会要項で次のように述べている。

児童虐待、性行動の低年齢化、性感染症の増加、若年者の妊娠など性に関わる事項が社会問題化しています。また、それらを助長するような出会い系サイトやインターネットなどによる性情報の氾濫や性の商品化が問題になっています。このため、今日こそ、性教育は、児童生徒等の人格形成のみならず健全な社会の形成にも極めて重要な意義をもつと考えられます。


石川哲也
（全国性教育研究団体連絡協議会理事長）

第42回大会は、これらの問題を解決するために、基本テーマとして「さらに広げよう！　性教育の視野を」を掲げ、世界的に著名なハワイ大学のミルトン・ダイアモンド教授をお迎えし、講義やワークショップを行っていただくなど、多彩な講師、助言者等をお招きしています。また、今大会は、アジア・オセアニア性科学学会とプログラムの一部をジョイントして開催致します。積極的にアジア・オセアニアの性科学者とも交流してみてください。

同じく、本大会の実行委員長である三浦康男・全国性教育研究団体連絡協議会副理事長・岡山県性教育協議会会長は、次のような開会挨拶を行った。

三浦康男
（全国性教育研究団体連絡協議会副理事長）

美しい自然に恵まれ、古くから文化が栄えてきました島根県、ラムサール条約登録湿地の指定を受けた汽水湖である宍道湖に面した島根県松江市にようこそおいでいただきました。全国性教育研究大会は、昭和 47（1972）年８月に、「性教育夏季セミナー」として始められたのが最初ですが、以来いくたの変遷を経て、今回で第 42 回ということになりました。本大会は、第 12 回アジア・オセアニア性科学学会と一部ジョイントして開催できる運びとなりました。性教育の分野において、日本国内だけでなく広く世界に目を向け、視野を広げる絶好の機会であると、たいへん喜んでいるところでございます。

性教育の重要性は叫ばれていますが、性教育を推進する研究団体、あるいは実践者は減少の傾向にあります。本大会では、分科会およびシンポジウム等では、性教育実践者の育成という観点からも参加者の皆様からお知恵をいただき協議をしたいと思っております。本大会を性教育実践の拡大につなげたいと願っています。

来賓として、文部科学省、島根県教育委員会、松江市教育委員会、第 12 回アジア・オセアニア性科学学会からの来賓が挨拶された。

以下、本大会のプログラムと内容の一部要旨を紹介する。１日目の８月２日は、岡山大学病院ジェンダークリニック産婦人科医で GID（性同一性障害）学会理事長でもある中塚幹也岡山大学大学院教授が「性同一性障害と学校」と題した講演を行った。続いてハワイ大学のミルトン・ダイアモンド教授が「性のマイノリティ：ホモセクシュアリティ、トランスセクシュアリティ、インターセクシュアリティ」と題した特別講演を行った。

２日目、８月３日は、午前９時 30 分から、小学校分科会、中学校分科会のほか、「学校・地域・医療をつなぐ性教育」と題した講義、ミルトン・ダイアモンド教授のワークショップ、午後にはシンポジウムが行われた。

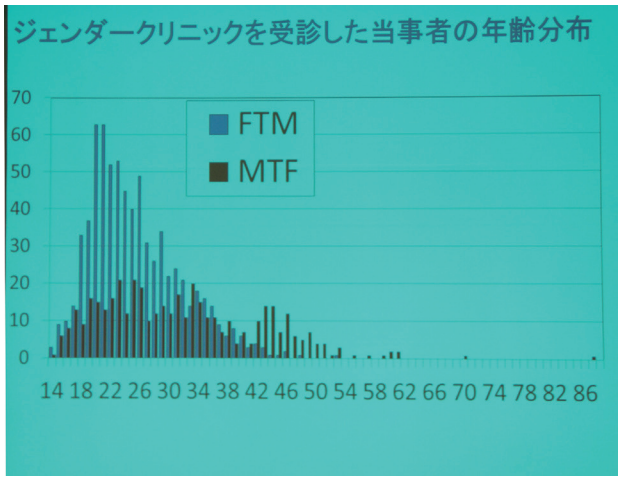
第１日　８月２日（木曜日）

◆ 講演 ◆

「性同一性障害と学校」

中塚幹也教授は、「性同一性障害とは何か」という基本的なところから話を始め、2006 年の性同一性障害の小学生の事例、岡山大学病院ジェンダークリニックの受診者の推移、若年層の性同一性障害当事者の実態、思春期の医療的支援のあり方と身体的治療、日本における診療ガイドラインの動向などを分かりやすく解説し、核心である学校での対応についての話へと話題をすすめられた。

学校とくに教員の対応について、「子どもが性別違



中塚幹也教授

和感をもっていることに気づいた場合、それが性同一性障害かどうかは別にして、学校の教員としては、まずは気持ちを受け止めて対応する必要があります。子どもの気持ちを受容しながらも、性同一性障害の的確な診断のためには、専門家と協力して慎重に観察していくことが必要です」と述べられた。

途中、2004年7月より一部の性同一性障害者の戸籍上の性別変更が可能になった「性同一性障害の性別の取り扱いの特例に関する法律」について、人権的に問題ではないかという項目に関する話し合いを会場に求め、発表をさせた。

この 特例法の第3条は次のようなものである。

> 次の各号のいずれにも該当するものについて、その者の請求により、性別の取扱いの変更の審判をすることができる。
> 一　二十歳以上であること。
> 二　現に婚姻をしていないこと。
> 三　現に未成年の子がいないこと。
> 四　生殖腺がないこと又は生殖腺の機能を永続的に欠く状態にあること。
> 五　その身体について他の性別に係る身体の性器に係る部分に近似する外観を備えていること。

成立した当時、項目の三は、「現に子がいないこと」という条文であった。 子が存在するという事実は変更不可能で、通常、親より子どものほうが長生きすることを考えると、事実上子持ちの当事者の戸籍変更は永久に不可能になり人権的に問題であると話題になった。2008年6月、「性同一性障害者の性別の取扱いの特例に関する法律の一部を改正する法律」が両院本会議で可決成立し、これにより「現に子がいないこと」という項目は、「現に未成年の子がいないこと」に改正された。中塚教授の会場への問いかけは、この問題についてのものであった。

中塚教授は、特例法の成立により、保険証、パスポート、履歴書など、種々の性別の記載に関連する社会生活上の支障の一部は解決され、パートナーとの結婚も可能になったが、依然として様々な問題は残っているという。最後に、講演を次のように締めくくった。

性同一性障害の当事者にとって、ホルモン療法を行い、性別適合手術を終了することは最終目標ではありません。GID当事者の幸福のためには、支援の視点も「医療」から「生活」へと広げる必要があります。家族への精神的支援、職場の意識改革を含めた就労支援も課題になります。そのためにも、大学を含めた「学校」の役割は非常に重要です。

◆ 特別講演 ◆

「性のマイノリティ：ホモセクシュアリティ、トランスセクシュアリティ、インターセクシュアリティ」

ミルトン・ダイアモンド教授の特別講演

ミルトン・ダイアモンド教授は、カナダで両親が性別を告げないで育てている特殊な例の子どもを紹介することから講演を始めた。

ダイアモンド教授は、ジェンダーとは何か、そのとらえ方の変遷をインターセックスを中心に、多くの図や写真を使用し解説された。

その具体的な不幸な事例として、「ジェンダー」という言葉を広めたというジョン・マネーの理論の問題点を例に話をすすめた。

ジョン・マネーは、インターセックスの子どもの発育研究から、「生まれて18か月以内の子どもの性自認は中立であり、その間に養育上の性別と外性器の外見を一致させ、二次性徴とともに適当な性ホルモンを処

方すれば、生まれつきの性別とは無関係にその子の性自認を決定できる」と主張した。それに対し、ダイアモンド教授は、生物学的に、はっきり男性もしくは女性として生まれた子どもにその理論を適用することはできない、と反論した。

1967年、そのマネーのもとに患者が連れ込まれた。当時生後16か月だった兄ブルース・ライマーと弟ブライアン・ライマーは双子の兄弟だが、割礼中に起きた事故によってブルースのペニスが焼き切られてしまう。マネーは、ペニスを失ったブルースに性転換手術を施してブレンダという女の子として育てるよう勧めた。手術は成功し、かねてから自分が主張していた通り、ブレンダはごく普通の女児として育っているとしてマネーはこのケースについて1975年に学術誌Archives of Sexual Behavior において報告した。

ダイアモンド教授は、この患者を独自に追跡調査し、ブレンダが14歳の時に自分の過去について真実を知り、その翌年以来デイヴィッドという男性として生活していたことを明らかにし、マネーの理論に実例で反論したことを語った。

ダイヤモンド教授は、そのほか数多くの具体的事例をあげながら、性器は性のアイデンティティあるいはジェンダーを決定しない、同じく社会的にどのように育てられたかもジェンダーを決定しない、文化も同じである、という。それらはアイデンティティあるいはジェンダーをどのように表現するかということに影響を及ぼすことはあるが、決定づけることはない。胎児の遺伝子やホルモンの状況が心理的、性的な発達を準備し、その後、社会的な力との関係の中で、他の人たちと比較し、体験していくなかで決まっていくのである、と述べた。

最も重要なことは、『ジェンダー」を決めるのは股の間に存在する性器ではなく、耳の間に存在している脳である、という。残念ながら未だに、マネーの理論を支持する人たちがいるが、インターセックスの人の場合、子どものときに手術をしないで、猶予期間をおくべきであると提言する。

また、手術本人への十分な説明と理解のうえで行われるべきであり、それはトンランスセクシュアルの性別適合手術の場合も同様で、その後の生き方に十分なフォローアップがなければならない、と強く述べた。

最後に、ダイアモンド教授は、「自然は、多様性を愛している。しかし、社会は多様性を嫌う」と締めくくった。

ミルトン・ダイアモンド教授

ダイアモンド教授の講演後、午後5時より、アジア・オセアニア性科学学会と合同でウエルカムパーティーが催され、その後、午後6時30分より、石川哲也理事長がシンポジストとして参加した「社会の変化のなかで考える人と性～次世代と性を語るために～」と題したアジア・オセアニア性科学学会主催の市民公開シンポジウムが開催された。

第2日　8月3日（金曜日）

大会2日目は、午前9時30分より小学校分科会、中学校分科会、午前10時から講義とワークショップが行われた。

また午後1時よりシンポジウムが開催されるなど、多彩なプログラムが組まれた2日目となった。

◆ 小学校分科会 ◆

小学校分科会は、司会者／浅沼誠・岩手県性教育研究会会長、助言者／三木とみ子・女子栄養大学教授のもと、2つの実践発表があった。

①「小学校における性教育の実践～気軽にできる性教育をめざして～」

児童数850余名、学級数28の岡山市の大規模小学校における性教育の実践例の発表で、性教育がどのように整備され定着したかの事例である。同校では、岡山市保健所の外部講師派遣事業を活用し、保護者参加のもと、計画的に性教育を実践している。

発表者は、廣惠真由美・岡山市立綾南小学校養護教諭。

分科会の様子

②「特別支援学校における性教育の実際～子どもたちとつくる性教育　今そしてこれから～」

特別支援学校知的障害部門小学部における性教育の実践例の発表である。小学部高学年の子どもたちの問題行動とそれへの対応を通して、性教育にどのように取り組んだかの報告であった。

発表者は、原田慎司・岡山県立岡山東支援学校教諭と大澤夏恵・同校養護教諭。

◆ 中学校分科会 ◆

中学校分科会は、司会者・林英雄北海道性教育研究会会長、助言者・三浦康男岡山県性教育研究会会長のもと、２つの実践が発表された。

①「豊かな心を育む性教育をめざして」

1967 年以来、実践的研究を積み重ねてきた札幌市立柏中学校の実践報告である。「男女を知り、生き方を考える」をメインテーマにし、すべての教員が指導に当たっている。

学年テーマは、１学年が「自分を知ろう」、２学年は「男女の関わりを考えよう」、３学年が「自分の生き方を考えよう」である。

発表者は、阿部綾乃・札幌市立柏中学校教諭。

②「中学校における性教育の実践～学校全体で性教育に取り組んだ実例～」

東京都の学校では、性教育バッシングにより性教育が沈滞した時期がある。性に関する正しい知識を学校で学べなかった生徒の多くが、商品化された歪んだ性を事実と信じ、誤った知識のままに大人になっている現状への強い危機意識から、学校全体で取り組んだ性教育の実践報告である。

発表者は、伊藤典子・小金井市立小金井第一中学校教諭、高野紗代子・武蔵野市立第六中学校養護教諭。

◆ 講　義 ◆

「学校・地域・医療をつなぐ性教育」

午前 10 時より、河野美江・島根大学保健管理センター准教授の講義が行われた。産婦人科の医師として総合病院で思春期外来を担当するなかで、心理的アプローチの必要性を痛感し、臨床心理士を取得した河野准教授の活動は幅広い。

年間 30 校を超える学校での性教育講習会、島根県健康相談活動アドバイザーとしての相談活動、「女の子のための ER」(http://onnanokonotameno-er.com) という Web ページの開設とメール相談、児童福祉施設における性教育、島根県内の女子大生が結成した「いなたひめプロジェクト」で学生と行っている子宮頸がん予防啓発活動など多彩である。

現代社会では、人間関係が希薄といわれるが、これらの活動を通して子どもたちは目を凝らせば、困ったときには助けてくれる人たちがまわりに必ずいることを実感しているといい、「まず大人が、身近な人とゆっくりと関係を育むことを大切にしたらどうか。その大切さを子どもに伝えていくことが、一番の性教育ではないか」と提言して講義を締めくくられた。

◆ ワークショップ ◆

「Simple Sex Education Techniques」

定員 20 名を大幅にオーバーして大盛況だったのが、ミルトン・ダイアモンド教授のワークショップである。このワークショップは、アジア・オセアニア性科学学会参加のために来日した研究者の参加もあり国際色豊かなものであった。

「Simple Sex Education Techniques」は、身近にあるペーパー、紙コップなどを使って行われた。５名前後のグループに分かれた実演・工作である。最初のテーマは、コンドームの使い方の実演発表。ペーパーをまるめて作ったペニスに、コンドームをどのように装着し、使用後、どう処理するのが正しいかの実演で会場はわいた。次は、男性または女性の内性器の模型を作るというテーマが与えられた。

内性器の模型は、それぞれのグループが工夫をこらして製作、たいへんユニークでリアルな男性器と女性

作品の説明をする参加者

器が作られた。

このワークショップのように簡単に手に入る材料を使ってできるさまざまなテクニックを講師がデモンストレーションし、それを参加者が実際にやってみるという手法は、日本の学校でも有効ではないだろうか。

◆ シンポジウム ◆

「性教育実践者の養成のための方策について考える」

石川哲也会長をコーディネーターに、本大会の基本テーマ「さらに広げよう！　性教育の視野を」をより深める内容のシンポジウムが大会を締めくくるプログラムであった。特別支援学校、保護者、大学、医療関係者のそれぞれの立場から、それぞれの経験や実践を通して、性教育を実践するためにはどのような課題があり、それを解決するためにはどのような点に配慮すればよいかなど、今後の性教育実践のための貴重な報告と提言がなされた。

最初のシンポジストは、藤尾愛一郎・岡山県立岡山東支援学校主幹教諭、テーマは「次の世代に～学校現場より～」。藤尾教諭は、学校における性教育の現状に強い危機感を感じているという。性教育を学校で実践し成果をあげていた世代が退職や指導的立場へと移行するなか、次につながる若い世代への確実なバトンタッチが喫緊の課題であるという。その方策として、まず身近な同僚に伝えていくことから始め、子どもを話題の中心としながら、若手とベテランがともに考え学んでいくことが、実践者を育成していくことになると、提言された。

「思春期のわが子との関わりを通して～子どもも親

シンポジウムの様子

も孤立しない環境を求めて～」をテーマに、保護者の立場から栗栖順子・益田市子ども若者支援センター親の会代表は、子育ての体験をもとに、親子の関係をどう構築してきたか、失敗談も含めて報告された。

大学教育者の立場から、岡崎愉加・岡山県立大学健康福祉学部准教授は、「性教育実践者養成のための方策について考える」をテーマに、性教育を充実させるためには、学校と医療の連携が要になると述べた。そのうえで、連携を促進するためには、教育者と医療従事者それぞれがもつ視点について相互理解を深め、性教育の視野を広げることが重要で、大学教育のなかで、お互いの基盤となる学問を学ぶ機会をもち、協力して活動するなどの交流を図ることが性教育実践者養成のための１つの方策と述べられた。

医療関係の現場からは、「助産師による性（生）教育の実践～いのちの楽習出前講座の活動より～」というテーマで、一般社団法人島根県助産師会バースデイプロジェクトのメンバーである中山正子氏が活動報告を行った。

バースデイプロジェクトのメンバーは 20 名で、2002 年 10 月、女性センター主催の３歳未満児と保護者対象の出前講座を皮切りに、10 年間で合計 619 講座を行っているという。その経験から、子どもたちにとって身近な先生の姿勢がとても大切で、教員自らが性を肯定的に捉え、楽しんで「楽習」する姿こそが、子どもたちに、性に対する肯定感をもたらす近道であると強調された。

次回、第 43 回全性連全国性教育研究大会は、2013 年８月８～９日「主体的にいきることから　生き方を考える」をテーマに奈良市で開催される。

北丸雄二の Sexuality Now

ニューヨーク リポート

第19回

性的少数者のための学校

日本でも毎月のように学校でのいじめ自殺が報じられているのですが、不思議なのはその中にほとんど1つもLGBT関連のいじめだ、というものがないことです。米国でのいじめの問題に関してはこのコラムでも何度も書いてきました。いじめで死んでしまう子たちの中には圧倒的に「ホモだ」「オカマだ」と揶揄されていた子たちが多いからです。実際にその子たちがゲイだったりレズビアンだったりトランスジェンダーだったりするのかというのはあまり関係ありません。問題は子どもたちの中で「ホモ」や「オカマ」や「オンナ男」や「オトコ女」が最上級の揶揄の言葉になっているということです。そして自分の性を意識し始める思春期の子どもたちは、自分がLGBTだと気づいているときは特に、そんな揶揄と侮蔑と自己嫌悪の環境にじわじわと浸食されてゆくのです。

私は現在の日本の教育現場を知りませんが、生徒の性的指向、ジェンダー自認、LGBTに関する話題はタブーなのでしょうか？　個人情報として触れないのが約束事なのでしょうか？

カナダ最大の都市トロントでいま、LGBTの生徒たちを優先的に入学させる高校を作るべきかどうかの議論が起きています。もちろんそれはLGBTの子たちを「揶揄と侮蔑と自己嫌悪の環境」から守ってやるためですが、一方で、そんな「隔離策」では根本にあるいじめの解決にはならない、教育とはむしろその「いじめ」自体をなくすことにある、という議論もあってなかなかまとまりません。

じつはこの種の試みはすでに1985年からニューヨーク市で行われています。射殺されたサンフランシスコ市の市政執行委員（市会議員）の名前にちなんでハーヴィー・ミルク高校と名付けられたその学校は当初「ヘトリック・マーティン・インスティテュート」という、精神科医のエメリー・ヘトリックと教育学者のダミアン・マーティンの男性カップルが設立した非営利のLGBTQ支援団体（Qは性自認などがクエッショニング＝まだわからない青少年のこと）が、部屋2つで運営する生徒十数人の特殊教育施設として始まりました。2003年からは市の教育委員会に属する正式な公立高校となり、この9月の新年度からも80人の生徒が通っています。教室も8つに増えました。

しかしここもやはり隔離策かやむを得ぬ緊急避難かで議論が分かれています。興味深いのは、映画にもなっている『X-MEN』の原作漫画の中に「ノーススター」という名の同性愛者のミュータントが登場するのですが、彼のカミングアウトのエピソードの中で母親が自分をこのハーヴィー・ミルク高校に入学させようとしたという話が紹介されるのです。ところが彼は、そういうのは異性愛者と同性愛者の分裂を助長するだけだという信念の下にこれを拒否する。そして後に同様に、プロフェッサーXが運営するミュータント学校への入学も断るのです。

ただし現実問題としてこの高校が成果を上げているのは事実です。ニューヨーク州全体の高校生の卒業率は70％ほどなのですが、ここは92％の生徒がきちんと最後までカリキュラムを終えて卒業する。もちろん少人数で先生たちの目が行き届くということもあるでしょうが、性的少数者としての悩みはここではかなり解決されるのも確かでしょう。理想論を論じているうちに現実の若者たちの高校時代の3年とか4年とかはすぐに過ぎていってしまうので、緊急避難場所としての教育施設は必要なのかもしれません。それにこの種の学校を作ったところで、圧倒的多数のLGBTQの子どもたちは一般の中学や高校で日々を生き抜いているのですから。

とはいえ、ここでもまず第一に、性的少数者が存在しているのだということを言葉にしないと、こういう議論すら成立しない。その大前提をまず日本の教育界で確立させることが急務なのだと思います。

きたまるゆうじ　　ニューヨーク在住（19年）ジャーナリスト／作家／元・中日新聞（東京新聞）ニューヨーク支局長。

「ありのままのわたしを生きる」ために

第19回 「身体改造」の開始

土肥いつき
京都の公立高校教員。24時間一人パレード状態のMtFトランスジェンダー。趣味の交流会運営で右往左往する日々を送っている。

文化祭最終日の夕方は、まさに「祭のあと」という一抹の寂しさがあります。でも、放送担当として生徒と一緒に走りまわったあとの小さな充実感を持ちながら、一人で見る夕暮れが好きなわたしです。

閑話休題。

Ｊさんに自分の話をしたその日から、わたしのトランスジェンダーを実践する日々がはじまりました。

36年間「男性」という道を歩いてきたわたしは、当たり前のように男性ジェンダーを身体の隅々まで身につけていました。当時のわたしは口ヒゲをたくわえ、パンチパーマとカーリーヘアの中間のような髪型をしていました。服装は汚れたジーンズによれよれのマウンテンパーカー。当時のわたしのコンセプトは「ワイルド＆ダーティー」でした。しかし、トランスジェンダーであると感じる自分と現実生活の自分を切りわけていれば、そこにさほどの矛盾を感じずに生きられました。だからこそ、ヒゲをはやしたままでも「トランスジェンダーなんです」とカムアウトできたのです。

しかし、トランスジェンダーを実践しようとするとそうはいきません。そこから、わたしの「身体改造」がはじまりました。実は、わたしには「身体改造」の経験が以前にもありました。教員になって３年目、ふと思い立って、半年で体重を20kg落としたことがありました。その時に「自分の身体はデザインできる」ということを知りました。わたしは自分の身体をトランスジェンダーを実践するにふさわしい身体、そして自分の望みの身体にデザインしようと考えました。

最初に着手したのはヒゲを剃ることでした。わたしがヒゲをはやしはじめたのは、Ｊさんと結婚した時でした。別にとりたてて「男らしく」と思っていたわけではなく、もともと童顔だったわたしは、「結婚もしたことだから、ちょっと大人っぽく」と、軽い考えで口ヒゲをはやすことにしたのです。しかし、結婚を契機にはやしはじめたヒゲを剃ることは、Ｊさんとの関係を変えることでした。自分の姿は変えたいけど、Ｊさんとの関係は変えたくない。ヒゲを剃ることによるＪさんの喪失感も想像できました。わたしは葛藤しました。しかし、その一歩を踏み出すことなしにトランスジェンダーを実践することはできないと思い、ヒゲを剃ることにしました。当時のわたしはヒゲがトレードマークでした。周囲の人たちから「ヒゲ、どうしたん？」と聞かれるたびに「ちょっと心境の変化」と笑ってごまかしました。しばらくすると周囲の人たちもヒゲのないわたしの姿に慣れていきました。しかし、わたしの中では、そういうごまかしではなく、きちんと自分のことを伝えたいという気持ちが、徐々に強くなっていきました。今にして思えば、教職員劇をきっかけにカムアウトの輪を広げ、少しずつ開放的になっていったＳさんの姿と、クローゼットなままの自分の姿の間に感じたギャップが大きな原因だったのかもしれません。さいわい、当時は教職員劇をきっかけに、わたしの勤務校や府立高校の人権教育研究会で同性愛についてとりあげはじめた時期でした。わたしはことあるごとに、セクシュアルマイノリティの問題にとりくむことの重要性を、同僚や人権教育研究会の人々に話しました。しかし、自分がトランスジェンダーであるということは、なかなか言えませんでした。

一方、わたしの「身体改造」は少しずつ進んでいきました。クチャクチャだった髪の毛もパーマをあてるのをやめ、伸ばすことにしました。徐々に「心境の変化」ではすまなくなっていきました。

1999年１月のある日、何気なく見た新聞のある記事に、わたしの目は釘づけになりました。それは、京都のトランスジェンダーのコミュニティ「玖伊屋」の紹介記事でした。ちょうどその日、人権教育研究会の会議がありました。わたしは思い切ってその新聞記事のコピーと、かつてある人に自分のことを伝えた時のメールを印刷し、会議で読んでもらうことにしました。「新聞」という力を借りてカムアウトする、またとない機会と思ったのです。ところが、読み終わった会議の参加者は、黙ったままでした。突然思い立ったカムアウトは失敗におわりました。しかし、それでもわたしは「女性」へと舵を切り、あともどりできないところへと自分を進めていきました。

BOOK GUIDE
今月のブックガイド

にじ色ライフプランニング入門

永易至文著
にじ色ライフプランニング情報センター／太郎次郎社エディタス
1365円（税込み）

老後のゲイを考える

性は生なり、というと一昔前のセクシュアリティ本のタイトルのようだが、家族制度からはみ出した性を生きようとすると、それは切実に、生に関わってくる。例えば、同性愛者。かつてのように自身のセクシュアリティを隠蔽してでも異性と結婚しなければならない、という社会的圧力は軽減したが、それが最終決着ではなかった。世の中の仕組みというのは、異性愛もとい男女による再生産家族を基準に設計されているので、なにかにつけ、想定外の事態に直面することになるのである。

まず、婚姻によらないカップルがマンションを共同購入しようとしても、ローンを個別に組むことが難しい。最近でこそ「ルームシェア可」の物件も見つかるようになってきたものの、同性同士が同棲することを民間も公的な住居もあまり考慮していない。あるいは、パートナーが急病に倒れた場合、医療者による説明がなされるのは血縁者にあたる人にかぎられている（ましてや、個人情報についてやかましい今日では）。自分の老身に介護が必要になったときでも、専業主婦の配偶者がいない独身者は多くの場合、働きながらその負担を背負い込むことになる……。

そうした人生の困難を、ゲイである筆者も最近痛感しているのであるが、それは、88歳になる老母がご多分にもれず体調を崩し、車いす生活を余儀なくされたためだった。ケアマネージャーらの尽力でなんとか生活は回っているものの、しかし、これがふつうの会社員の人だったら介助生活など可能なのか、と首を傾げたくなることも少なくない。フリーランスで仕事をしている筆者だから平日の昼間、老親を病院に連れていくことができるが、もし会社員だったとしたらいちいち会社を休むことができるのだろうか……等々。

性の自由には、当然こうした問題がもれなくついてくる。しかし、だからといって人生には可能性がないわけでもない、ということをメッセージしてくれるのが、永易至文書『にじ色ライフプランニング入門』である。ゲイや独身者の視点からライフプランを研究している、ファイナンシャルプランニング技能士である著者が、マネープランから保険、住居の計画から介助、自身の老後まで、見事に情報を整理し、可能なこととそうでないものの仕分けを示してくれる。

前述の住宅問題も、ふつう都営や県営の公営住宅は非親族の同性２人による入居はできないが、大阪府の公社住宅では、非親族によるハウスシェアリング制度が導入されていたり、UR（都市再生機構）でも、全国の304か所の団地では非親族２名による入居が可能なのだという。

また、非婚カップルには、いざというときのために「意思表示書」を作成することなども勧めている。あらかじめ看護や医療説明、延命措置の決定などを託す相手を指示しておく書面を、弁護士や書士、公証人に作成してもらっておくことで、血縁者だけにパートナーを委ねずに済むとのこと。

このように、本書は同性愛者や独身者がライフコースの様々な段階で必要な情報を満載している一方、一人暮らしの人間が突然死したケースの発見の困難さなどにも言及していて、あまり向き合いたくない話題にも事欠かない……。そう、人は実際に自分が厄介に見舞われないかぎり、老病死については考えたくないものなのである。しかし、性は思春期のテーマとしてだけでなく、人生という長いスパンで考えられなければならない。マイノリティや独身者ならばいっそう、あらゆるケースを検討しておくべきだろう。

著者の永易至文氏はシニカルに語りかける。「老後の来ないゲイはいません」と。

（作家　伏見憲明）

研究会、研修会等の情報を下記まで、郵送または、Fax03-5800-0478でお寄せください。
〒112-0002　文京区小石川2-3-23春日尚学ビル B1
日本性教育協会「JASE ジャーナル」係

12月23日（日）13：00～17：00

関西性教育研修セミナー2012冬

児童生徒の性暴力被害に対する学校での危機対応
～スクールカウンセラー、スクールソーシャルワーカーの実践から～

内　容　学校教員、養護教諭、SC、SSW、施設職員等を対象とし、児童・生徒が直面する性の諸問題への危機介入、および支援的環境づくりなどに関する最新知見・情報を共有する。
講師：藤森和美（武蔵野大学）、野坂祐子（大阪教育大学）、ほか。

会　場　関西学院大学　大阪梅田キャンパス 1004 号室（大阪市北区茶屋町 19－19）

参加費・問合せ先等
参加費／1,000 円（資料代）　**定　員**／80 名（先着順）　**対　象**／子どもへの支援・教育に関わる方、テーマに関心のある方。
主　催／関西性教育研修セミナー運営委員会　**協　賛**／日本性教育協会
問合せ先／E-mail　higashi@sw.osakafu-u.ac.jp

11/24（土）～11/26（月）

第26回日本エイズ学会学術集会・総会

【テーマ】つなぐ　つづける　ささえあう
【会　場】慶應義塾大学日吉キャンパス（神奈川県横浜市港北区日吉４－１－１）
【会　長】樽井正義（慶應義塾大学文学部）

【問合せ先等】**主　催・問合せ先**／〒102-0075　東京都千代田区三番町２　三番町 KS ビル
株式会社コンベンションリンケージ内　日本エイズ学会運営事務局　TEL　03-3263-8688　FAX　03-3263-8693
E-mail　aids26@secretariat.ne.jp　URL　http://www.secretariat.ne.jp/aids26/index.html

11/24（土）
10：00～16：30

NPO 法人レジリエンス
ファシリテーター養成研修　東京会場

【会　場】きゅりあん（大井町駅徒歩１分）
【内　容】DV・トラウマからの回復をサポートするためのファシリテーターの養成を１日で行う研修。「ファシリテーターにとって必要な事」「レジリエンス☆こころの care 講座　テーマ①『DV・トラウマを理解する』を開催するためのファシリテーター養成研修」「性暴力に関する支援者研修 SAFER101」

【問合せ先等】
参加費／8,000 円　**定　員**／50 名（先着順、定員になり次第締切）
主　催・問合せ先／NPO 法人レジリエンス　FAX　03-3408-4616　E-mail　day.tokyo@resilience.jp